

二〇二五年十二月六日(土) おのみち文学三昧研究発表会

三条西実隆独吟『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』について

芸術文化学部日本文学科 三年 上田萌生

〔連歌について〕

連歌とは、「五・七・五」の上の句と「七・七」の下の句を交互に詠み継いでいく文芸である。代表的な形式は、百句を連ねる「百韻」である。各句は独立していながらも、前句との関連を意識して付けることが重要であり、これを付合(つけあい)という。さらに、同じ題材やイメージの重複を避けるために、題材の扱いには一定の規則が設けられている。これを式目と呼ぶ。式目によって全体の流れが整えられ、句の展開は停滞せずに進んでいく。この流れを行様(ゆきよう)という。賦物は、もともとは百韻すべての句に詠み込むものだったが、当該連歌の頃には、発句のみに「賦何人連歌」、「賦山何連歌」などと記し、発句の中から一字をとって「何」に当てはめ、名称とするようになる。

〔動機と目的〕

『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』は、室町時代後期の公卿三条西実隆が、北野社御法楽の連歌会において独吟形式で詠んだ作品である。作者の三条西実隆は、一万首以上の詠草を残す歌人であると同時に、『源氏物語』や『伊勢物語』の研究をはじめとする古典学者でもあった。また、実隆は、連歌師としての一面を持ち合わせているが、連歌の個別の作品論に関する研究は少ない。そのため、自ら彼の連歌の内、未翻刻のものを中心に翻刻し、句や行様を分析することで、実隆の連歌について総合的に研究したいと考えた。

その手始めとして今回は『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』を扱う。本作品については、『新天理図書館善本叢書 第31巻 連歌卷子本一』「解題」に、次のような指摘がある。

文明十三年二月二十三日から二十五日にかけて後土御門天皇の黒戸で張行された北野法楽の千句連歌は、初めての禁裏千句として特別視され(『実隆公記』文明十三年二十五日条)、その成就是天下泰平の瑞相とされた(『お湯殿の上の日記』同日条)。禁裏千句は以降、十四年二月、十四年二月、十六年二月、十七年六月、十八年四月、十九年(長享元年)六月と、文明後期にあっては年に一度、天神忌日の二月二十五日、もしくは天神生誕日の六月二十五日の前後、北野社法楽を目的として張行された。(小森崇弘「応仁・文明の乱後の禁裏文芸壇と足利将軍家」『戦国禁裏と公家社会の文化史―後土御門天皇后を中心に』、小森崇弘君著書刊行委員会、二〇一〇)

〔中略〕

長享・延徳・明応年間、千句張行は毎年恒例の行事ではなくなり、二月と六月の法

楽二百韻に縮小化される。文明十九年六月二十五日の北野法楽千句は、当代連歌の頂点に位置する催しとして、後土御門天皇連歌壇の最盛期に張行された千句である。その千句の一巻である実隆独吟連歌百韻は、諸記録によって成立の大概を知り得る希少な事例であり、綿屋文庫蔵懷紙改装卷子本は、連歌張行・指合修正・本文治定の三段階を留める室町中期の連歌懷紙原本として注目に値する。

本発表では、発句や三つ物、行様を確認し、同連歌会の他作品と比較することで、当該連歌の特徴について考える。また、法楽連歌としての特性がみられる神祇の句や述懐の句に注目する。

〔『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽』の概要〕

「解題」に以下の指摘がみられる。

原本には、次に示す十五句十九箇所に擦り消しによって語句を訂正した痕跡がある。

15 第八紙	14 第八紙	13 第七紙	12 第七紙	11 第五紙	10 第五紙	9 第五紙	8 第五紙	7 第七紙	6 第六紙	5 第二紙	4 第四紙	3 第四紙	2 第四紙	1 第一紙	錯簡訂正前 懷紙の位置	擦り消し箇所
名残折裏挙句	名残折裏第二	名残折裏第五	名残折裏第一	三折裏第十三	三折裏第十二	三折裏第十一	三折裏第七	二折裏第七	二折裏第五	二折裏第一	初折裏第十四	初折裏第九	初折裏第四	初折裏第四	懐紙の位置	「岩かねまくらなかき夜の空」の「なか」
																「うへをくさくら春もかきらす」の「かきらす」
																「うき秋にもろき涙もはらひかね」の「もろき」
																「似たるをこそはその友とすれ」の「その友とす」
																「我ゆへに人のなき名のもれはおし」の「もれ」
																「さく梅の花ぞむかしの初せ山」の「そ」
																「永日は雲のいくへをめぐららん」の「く」
																「きしかたおもふ涙おちけり」のおもふ
																「ふかき窓おくゆか敷もすみなして」の「ふかき」
																「たのむもとをき人のおひさき」の「お」
																「ねきことこのいふかひなくはよもあらし」の「の」
																「みこし岡みゆきの道の残りつゝ」の「道の残」
																「月も又なみたの底に明すきぬ」の「又」
																「そらなしたひそ籠のいるゝ鳥」の「そらな」
																「すまん雲井の秋の久しさ」の「秋の」の「ひそ」

(本百韻と同一の端作を有する連歌百韻二巻)

○宮内庁書陵部蔵『御連歌』端作『文明十九年六月二十五日／北野社御法楽』

賦物「賦山何連歌」作者…後土御門天皇

・列聖全集編纂会 編『皇室文学大系 第一輯』(一九七九) 東京…名著普及会

○曼殊院蔵『文明十九年六月朝何百韻』端作「文明十九年六月二五日／北野社御法楽」

賦物「賦朝何連歌」作者…甘露寺親長

*三十四箇所の擦り消し修正がある。

*適宜濁点を付し、表記は私に改めた。

〔連衆〕

- ・後土御門天皇（四十六歳）
- ・近衛政家（前関白・四十三歳）
- ・西園寺実遠（左大臣・四十三歳）
- ・大炊御門信量（右大臣・四十六歳）
- ・中院通秀（前内大臣・六十歳）
- ・徳大寺実淳（前内大臣・四十三歳）
- ・葉室教忠
- ・（大宰権帥・前権大納言・六十五歳）
- ・勸修寺教秀（権大納言・六十二歳）
- ・甘露寺親長（前権中納言・六十四歳）
- ・三条西実隆
- ・（侍従・権中納言・三十三歳）
- ・姉小路基綱（参議・四十七歳）

この十一名が一堂に会して独吟した百韻十一巻は、のちにあわせて北野法楽千句・追加平野法楽百韻として奉納された。『後法興院記』より、張行日の五日前の六月二十日、後土御門天皇の側近より禁裏においておのおの独吟により法楽連歌を張行する旨と発句題は「納涼」とすることが告げられた。

張行日の二日後の六月二十七日、禁裏より指令の修正を求められた政家は、天皇が不審を付した箇所を訂して懐紙を進上しなおしている。（『後法興院記』）前述の現存懐紙に擦り消しが多いのは、天皇の指摘により指令を訂した結果であった。文明十九年六月二十五日の北野法楽千句は、後土御門天皇の意志と指導のもとに張行されたのである。

〔翻刻〕

《凡例》

- 一、底本は天理大学附属天理図書館編 『新天理図書館善本叢書 第31巻 連歌巻 子本集一』を用い、適宜濁点を補った。
- 一、原文の行間を調整しているが内容の改変は行っていない
- 一、上部に通し番号を付し、活字化した。表記に際しては、旧字体を現代の通行字体に改め、仮名遣いは原文のままとした。
- 一、句の下部に部立を記している。
- 一、本文整理に際し、次の二つの諸本を参考に翻刻を行った。

①文明十九年六月二十五日／北野社御法楽／賦唐何連歌

コレクション・広島大学文学部、福井文庫、国文/4748/N 『国書データベース』

ース』 <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100018962/4?ln=ja>

↓天理本の錯簡訂正前の写本

2025/12/6（土） おのみち文学三昧 研究発表会

上田萌生 「三条西実隆独吟『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』について」【発表資料】

②文明十九年六月廿五日北野社御法楽唐何

〔写〕江戸後期

コレクシヨン…東京大学総合図書館, 連歌俳諧集成, 青洲文庫(3402) 『国書

データベース』 <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100419920/3?ln=ja>

一、『新天理図書館善本叢書 第〇二〇一巻 連歌卷子本集一』の解題に「原本には第二紙から第六紙にかけて錯簡がある。」とあり、解題の著者である尾崎千佳氏が錯簡訂正を行っている。

上田萌生 「三条西実隆独吟『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』について」【発表資料】

文明十九年六月廿五日
北野社御法楽
賦唐何連歌

(初折表)

1 こぬ秋はたが

偽ぞ松の風 実隆

(夏・植物)

2 苔に露ちる
夕立のあと

(夏・降物)

3 月はいさこりしく
雲の峯こえて

(雑・光物・聳物)

4 岩がねまくら
ながき夜の空

(雑)

5 いねがてに独や
鹿のうらむらむ

(秋・動物)

6 虫のなく音も
しげき野の末

(秋・動物)

7 影よわき日はくれ
行も程なくて

(雑)

8 小川の水か
しろき一すぢ

(雑・水辺)

9 帯にせる溪はる
かなる山たかみ

(雑・水辺・山類)

(初折裏)

10 ふもとをきけば
鳥かへる声

(雑・動物・山類)

11 家ぢとは花の

陰をやたのまゝし

(春・植物)

12 うへをくさくら
春もかぎらず

(春・植物)

13 待人は年に
まれなる契にて

(恋)

14 わすられはてば
身をいかにせむ

(恋)

15 霜雪のよるの
枕のものおもひ

(冬・降物)

16 老ては月も
うとかりぬべし

(雑・述懐)

17 うき秋にもろき
涙をはらひかね

(秋)

18 雁も旅なる
こゑのあはれさ

(秋・旅)

19 からろをす船子
のうたふ浦遠み

(雑・水辺)

20 しほあひはやし
むしあけのせと

(雑・水辺・名所)

21 たつ波は松の
ひゞきにかよひきて

(雑・水辺・植物)

22 似たるをこそは
その友とすれ

(雑・人倫)

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
波にきえけり おきのしらすも	河水はとけて 幾日の雪の声	かすみのおくぞ 行人もなき	あかざりし吉野の 花に春くれて	紅葉の山よ いづくとはまし	この里は時雨を よその秋の風	くもらぬ月に むかふうれしき	わが君のときはの かげをいのりきて	竹の宮こは 神さびにけり	法を聞世に あひあふはかたかれや	あだなる恋に たゆる玉の緒	我ゆへに人の なき名のもれはおし
(雑・水辺)	(春・水辺・降物)	(春・簞物)	(春・名所・植物)	(秋・植物)	(秋・降物)	(雑・光物)	(雑・人倫)	(雑・神祇)	(恋・釈教)	(恋)	(恋・人倫)
46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35
かぎりこそあれ やよつれなきも	しのびねもいまは かたらへ郭公	くるとあくとも わかぬ五月雨	永日は雲の いくへをめぐらむ	かすむ檜原は 色だにもなし	さく梅の花ぞ むかしの初せ山	道はたえせぬ やまとことのは	心こそ時につけ てもかはるなれ	たがふなよゆめ わがおもふすぢ	黒かみのあかぬ 手枕しきかはし	明やすき夜の 月ぞかたぶく	雲ちかくあしべの たづのなきたちて
(恋)	(夏・動物)	(夏・降物)	(雑・簞物)	(春・山類)	(春・植物・名所)	(雑)	(雑)	(雑・人倫)	(恋・時分)	(雑・光物・時分)	(雑・簞物・動物)

(二折表)

(二折裏)

47 うきに我たへては
 (恋・人倫)

48 すみすてばやの
 草のかり庵
 (雑・居所)

49 月なくば露の
 さむしろ寝られめや
 (秋・降物)

50 秋のあわれは
 夢かへる程
 (秋)

51 ほのかなる野寺の
 鐘の身にしみて
 (秋・釈教)

(三折表)

52 たゞけふのみの
 花の夕風
 (春・植物)

53 鶯も春の
 別はおしかれや
 (春・動物)

54 入べきものか
 雲かすむ山
 (春・簞物)

55 世中はいとふに
 かたきならひにて
 (雑・述懐)

56 つらきながらも
 ながきちぎりぞ
 (雑・述懐)

57 我ならでわくる
 跡なき蓬生に
 (雑・人倫・植物)

58 みるだにすごし
 あるゝふるさと
 (雑・述懐)

59 簾たえうてな
 かたぶく露の底
 (秋・降物)

60 風に分たつ
 月の入かた
 (秋・光物)

61 すぎるなく山路の
 旅のいかならむ
 (雑・旅)

62 とをきさかひは
 きくつてもがな
 (雑)

63 まぼろしのかたる
 こと葉もある物を
 (雑)

64 しの中もや
 はてはもれなむ
 (恋)

65 わすれ草心に
 うふる道しらで
 (恋)

66 きしかたおもふ
 涙おちけり
 (雑)

67 をのが身をなげくや
 小野ゝ雪の中
 (冬・降物)

68 炭やくをきな
 年ふかくみゆ
 (冬・人倫)

69 こる柴に冬さく
 梅を折そへて
 (冬・植物)

81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70
夢に成はてゝ たらちねの諫は	かきをく跡に みぬよをぞしる	みこし岡みゆき の道の残りつゝ	この野々神は 手向うくなり	ねぎごとのいふかひ なくはよもあらじ	たのむもとおき 人のおひさき	ふかき窓おくゆか 敷もすみなして	夜を待ほたる ひかりたえぐ	玉藻のなびきあひ 風にちる露の	霧たちきえて すめる河なみ	秋の月心の くまものこすなよ	やぶしわかずや ひはてらすらむ
(雑・述懐)	(雑・述懐)	(雑・神祇)	(雑・神祇)	(雑・神祇)	(雑・人倫)	(雑・居所)	(夏・動物)	(秋・降物・水辺)	(秋・簞物・水辺)	(秋・光物)	(雑・光物)
93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82
心のはらはかし 馴て後つらき	あかぬおも影 はつかにみるに	雲は今おぼろ 月夜に立そびて	若葉によはき 春風の音	かた山の花や 今朝はたちりぬらん	あふ人はなし 夕の雨に	ひきすてゝくちたる 船に鷺のみて	ふる江につづく 沢水の末	さきにほふ秋萩 しのぎ分る野に	裳すそもぬるゝ 露のさゝ原	月も又なみだの 底に明すぎぬ	たゞわれからと 物おもふ時
(雑・述懐)	(雑)	(春・簞物・光物)	(春・植物)	(春・山類・時分)	(雑・降物・時分)	(雑)	(雑・水辺)	(秋・植物)	(秋・衣裳・降物)	(雑・光物)	(雑・述懐)

94	そらなしたひそ 籠にいる鳥 (雑・動物)	98	かきねをみれば 菊の色く (秋・植物・居所)
95	野も山も雪に とどたる比なれや (冬・降物・山類)	99	うつろふや月の 下水しずかにて (秋・光物・水辺)
96	都のうちも 風のさむけさ (冬)	100	すまむ雲井の 秋の久しき (秋・簞物)
97	庭の松そともの 竹の陰ふかみ (雑・植物・居所)	実隆 独吟	

一、発句と三つ物について

一―一、三つ物

発句については、二条良基が『筑波問答』で以下のように説いている。

当道の至極の大事、たゞ発句にて侍なり。発句わろければ一座みなけがさる。(中略)
発句のよきとは申は深き心のこもり、詞優しく、気高く新しく、当座の儀にかなひたるを上品とは申す也。

このように、連歌において発句は重要であった。また、伊地知鐵男氏『連歌の世界』では、「古来発句の故実としては、第一に張行の折の季節、と所の状景・景気を違えず詠まなければならなかった。」と指摘されている。このように、発句は場への挨拶という役割を持つ。脇句については、『筑波問答』で以下のように説かれている。

脇句は発句を受けてする事なれば、さのみ心籠る事などあるまじけれど、これもあまり平懐ならんは悪くや。

あくまで発句の意に逆らわず、そえるように付けるのがよいという。

第三の句については、宗牧が「発句の心を離れ、少し脇に縁有やうにい出すべし。」と説いており、第三の句で意味を転じていくことが求められる。

連歌は、前句に付けて前々句から離れるという原則に基づいて展開していく。そのため、意味的な繋がりの最小単位は、三句であり、巻頭の三句は重要であるといえる。

現存する当該連歌と同一の端作を有する後土御門天皇と甘露寺親長による連歌百韻との比較を通じて実隆の表現を考察する。

〈実隆〉

1 こぬ秋はたが
偽ぞ松の風

(夏・植物)

2 苔に露ちる

夕立の跡

(夏・降物)

3 月はいさこりしく

雲の峯こえて

(雑・光物・聳物)

〈後土御門天皇〉

1 明にけり涼しき
かげの一夜松

(夏・植物)

2 残る月にぞ

宮の夏なき

(夏)

3 人通ふ川上

とをく道みえて

(雑・水辺)

〈親長〉

1 すゝしさをよそにも
とはぬ木陰かな

(夏・植物)

2 月まちいでつ

水むすぶくれ

(夏・水辺・時分)

3 程もなく秋の日

なみにうつり来て

(秋・水辺)

それぞれの発句を比較すると、後土御門天皇と親長が「涼し」という語で「納涼」を表しているのに対し、実隆は、「涼し」という語を用いていない。次に、発句を取り上げ、実隆がどのように「納涼」を表現しているのか考察する。

一一二、発句

1 こぬ秋はたが偽ぞ松の風

○たがーだれの

【用例】*傍線は発表者による。(実隆の発句と類似している語に引いた。)

『草庵集』恋・九六三(頓阿)

不断光寺にて歌よみ侍りしに、待恋

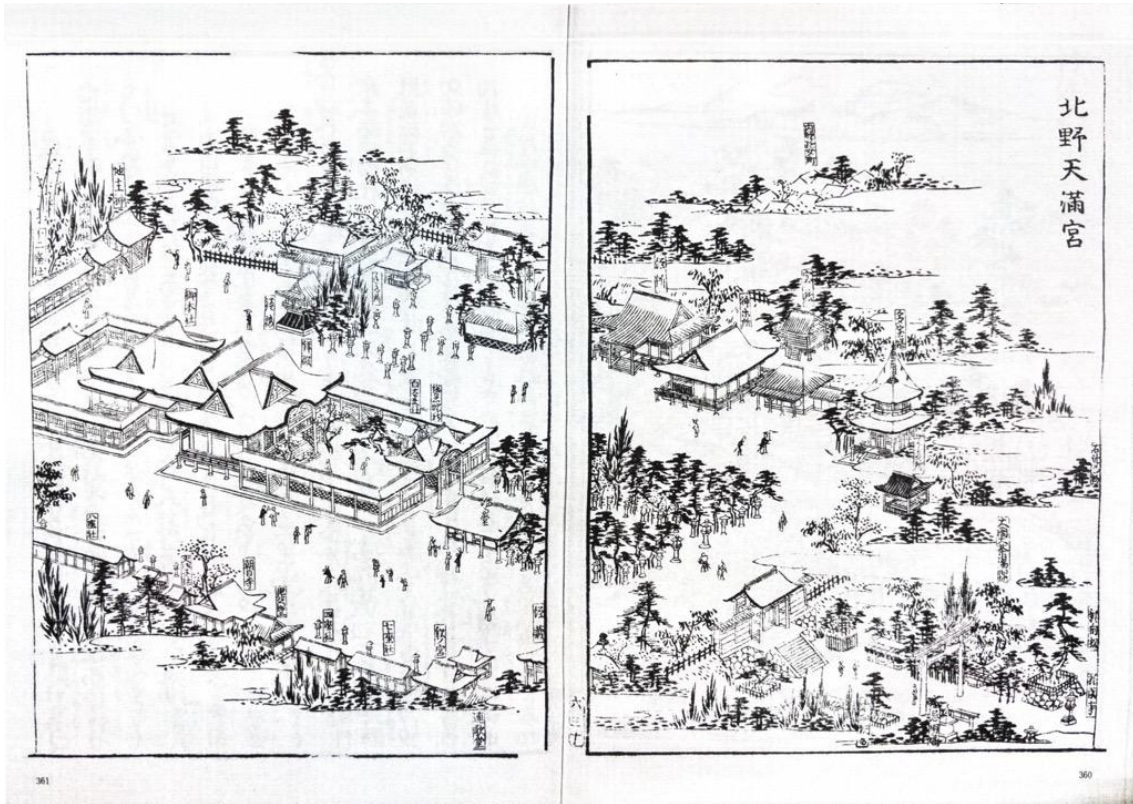
とはねねば中中つらき偽りをたがためとてかちぎりおきけん

『拾遺愚草』秋・一七四九(定家)

秋きぬとたがことのはかつげそめしおもひ立田の山の下露

○松― 黒松・赤松など、マツ科の常緑針葉樹の総称。落葉せず、また樹齡の長いことから、長寿の象徴となる。あるいは治政や世の繁栄が長く永遠に続くことを祈る場合にも用いられる。(『歌ことば歌枕大辞典』より抜粋)

『都名所図会』 安永九年（一七八〇） 初版



（*秋里湘夕『都名所図会』 2より転記）

絵から北野社に松が植わっていたことがわかるため、松は北野社にゆかりがあるといえる。

○松の風―松を吹く風。賀の意や漢詩的趣向内容を込めた詠も多い。

（『歌ことば歌枕大辞典』より抜粋）

【用例】

『宗碩発句集』 一九〇・夏

涼しさやけふみん人の松の風

上田萌生 「三条西実隆独吟『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』について」【発表資料】

『兼如発句帳』三九二・夏(兼如)
涼しさをつたへていく代松の風

【通釈】

秋が来ないといったのは誰の嘘だ。松に風が吹いたら涼しいではないか。

◎納涼題の詠み方

「松」と「こぬ秋」が用いられている用例をあげる。

【用例】

『自然齋発句集』八三七・夏(宗祇)

松にけさこぬ秋くらす嵐かな

『老耳集』二六八(宗長)

こぬ秋風そ松に音する

『兼如発句帳』三八一

博多の松原にて

松原はこぬ秋風のやとりかな

宗祇の「松にけさく」の句は、「こぬ秋」という語を用いることで夏の句としている。また、宗長や兼如の句から、松と「こぬ秋風」を関連させて詠まれていることがあったとわかる。実隆は、「こぬ秋」と「松」の取り合わせにより「納涼」を表現していると考ええる。また、「松」は、北野社と由縁があるため、発句として場の挨拶とする役割を果たしている。

二、行様について

後土御門天皇と甘露寺親長との三作品の行様を比較するため、三者の百韻の部立・素材参考資料の表に示した。

〔部立〕春・夏・秋・冬・恋・雑 〔素材〕光物・時分・簞物・降物・山類・水辺・動物・植物・人倫・居所・衣裳・旅・名所・恋・述懐・神祇・釈教

* (光田和伸(二〇〇七)「連歌の「詠み方」と「読み方」』『日本研究』第三六卷一三九―一六四頁)を参考に部立・素材を判断した。

百韻連歌の正式な作法では四枚の懐紙を用い、横二つに折り、その裏表に初折から八・十四、十四・十四、十四・十四、十四・八句ずつ書きとめられることから、表を八つに分けて

いる。また、二条良基の『筑波問答』では、連歌の行様について、雅楽の「序破急」に喩え、「一の懐紙は、序、二の懐紙は破、三・四の懐紙は急にてあるべし」と説く。

◎比較をした結果の気づき

- (一)、 名所の句を、実隆(三句)、後土御門天皇(四句)、親長(六句) 詠んでいる。
- (二)、 神祇の句を、実隆(三句)、後土御門天皇(三句)、親長(二句) 詠んでいる。
- (三)、 述懐の句を、実隆(八句)、後土御門天皇(五句)、親長(三句)と実隆が最も多く、述懐の句を詠んでいる。

三、行様の気づきを得て

三十一、名所

19	からろをす船子 のうたふ浦遠み (雑・水辺)	30	紅葉の山よ いづくとはまし (秋・植物)	40	道はたえせぬ やまとことのは (雑)
20	しほあひはやし むしあけのせと (雑・名所・水辺)	31	あかざりし吉野の 花に春くれて (春・名所・植物)	41	さく梅の花ぞ むかしの初せ山 (春・植物・名所)
21	たつ波は松の ひびきにかよひきて (雑・水辺・植物)	32	かすみのおくぞ 行人もなき (春・聳物)	42	かすむ檜原は 色だにもなし (春・山類)
20	むしあけのせと むしあけのせと (雑・名所・水辺)				

○むしあけのせとー備前国の歌枕。『狭衣物語』巻一末尾の飛鳥井の女君投身の舞台として著名。(『歌ことば歌枕大辞典』より抜粋)

【用例】

『新編日本古典文学全集二九』「狭衣物語」一五一頁

寄せ返る波ばかり見えわたりつつ、船のはるかに漕ぎ行くが、いと心細き声にて、「虫明の瀬戸へ来よ」と歌うが、いとあはれなれば。

流れても逢ふ瀬ありやと身を投げて虫明の瀬戸に待ちこころみむ

『拾遺愚草』一一六九・(定家)

しるべせよむしあけのせとの松の風ほか行く浪のしらぬ別に

『雪玉集』二七八九(実隆)

古渡秋夕

松に吹くうらわの風もあきはなほ夕かなしきむしあけのせと

「狭衣物語」に「船のはるかに漕ぎ行くが」とある。19句目の「からろをす船子のうたふ浦遠み」との関連がみられる。

また、「松」と「むしあけのせと」を取り合わせた用例が複数見られることから、備前国の現地に松があると考える。よって、21句目の「たつ波は松のひゞきにかよひきて」では、「狭衣物語」からは離れ、備前国の「むしあけのせと」を詠んでいると見られる。

31

○吉野―大和国の歌枕。現在の奈良県南部、吉野郡一带と五條市の一部を指す。(中略)一般に吉野が桜の名所として意識されるのは、平安時代後期である。(中略)『金葉集』に、「花薫レ風といへることを詠める」と題する歌、「吉野山峰の桜や咲きぬらむふもとの里にほふ春風」(春・二九・忠通)があり、吉野の桜の美を叙景的に詠もうとする傾向が、この時代頃から盛んになる。(『歌ことば歌枕大辞典』より抜粋)

【用例】

『基佐句集』春・四〇(基佐)

末かすむ吉野の宮の春のくれ

『最勝四天王院和歌』一五(雅経朝臣)

吉野山こぼれてにほふ花なればかすみのおくのみねのしら雲

「吉野」と「紅葉」の用例は見つからなかった。そこで、30句目では「紅葉の山よいづくとはまし」と詠んでいる。また、「紅葉」が詠まれていることから31句目の「あかざりし」は「赤ざりし」と「飽かざりし」の掛詞になっていると考える。

41

○初せ山(初瀬)―大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市初瀬町の一带をいう。泊瀬山のほか卷向山・三輪山や天神山・鳥見山により、三方を山に囲まれた峡谷で、また伊賀や伊勢国に通じる交通の要所であった。古く武烈天皇や雄略天皇の宮殿の所在地とされ、また長谷寺があることでよく知られ、平安時代には初瀬で長谷寺を指すことのほうが多い。同寺の創建については諸説あり、菅原道真筆と伝える『長谷寺縁起』によれば、天

平五年（七三三）という。本尊は十一面観音で、初瀬の地は観音の補陀落（ふだらく）浄土とされた。現世利益を求める多くの参詣者を集めたため、『蜻蛉日記』『更級日記』などの日記文学作品に参籠の記事が見えるほか、物語では『源氏物語』玉鬘（たまかずら）の巻に「（八幡の宮に）うち次ぎては、仏の御中には初瀬なむ、日の本の中にはあらたなる験（しるし）あらはし給ふと、唐土（もろこし）にだに聞こえあんなり」といわれ、夕顔の乳母子右近と夕顔の娘玉鬘が再会をはたしており、『住吉物語』の男主人公は長谷の夢想により、失踪した女主人公の姫君が住吉に隠れ住んでいることを知らされている。また歴史物語『水鏡』の舞台にもなっているというしだいである。和歌においては「泊瀬（初瀬）」のほか、「初瀬川」「初瀬山」「小泊瀬（を）はつせ」などと詠まれる。

（『歌枕歌ことば歌枕大辞典』より抜粋）

【用例】

『夫木和歌抄』春・七二八（光明峰寺入道撰政）

御集

はつせ山たにそはかけていたびさし下ふく風に梅の香ぞする

『雪玉集』春・七七〇六（実隆）

霞

長谷寺奉納之中

くもるをや春の色なるはつせ山ひばらは時もわかぬものから

40句目では「道はたえせぬ やまとことのは」と和歌の道が絶えないこと詠む。41句目の「むかしの初せ山」は、古く武烈天皇や雄略天皇の宮殿の所在地とされた長谷寺を示していると考ええる。和歌の道の永続性を、初瀬山が歌枕として古くから詠まれていることを例に表現していると考ええる。また、道真が『長谷寺縁起』を記しており、41句目で「梅」が詠まれていることから、道真との関連が見られた。

「初瀬山」と「檜原」の取り合わせは複数見られた。また、「檜原」と「霞」の取り合わせも複数みられた。42句目では「かすむ檜原は色だにもなし」と詠むことで春の情景を詠んだ句に転じている。

このように当該連歌には、歌枕が詠みこまれた句が見られ和歌の表現技法が用いられていることが確認できる。

三一二、神祇

神祇の句とその付句、前句を次に示す。

〈実隆〉

25 法を聞世に
あひあふはかたかれや (恋・釈教)

26 竹の宮こは
神さびにけり (雑・神祇)

27 わが君のときはの
かげをいのりきて (雑・人倫)

76 たのむもおき
人のおひさき (雑・人倫)

77 ねぎごとのいふかひ
なくはよもあらじ (雑・神祇)

78 この野と神は
手向うくなり (雑・神祇)

79 みこし岡みゆき
の道の残りつゝ (雑・神祇)

80 かきをく跡に
みぬよをぞしる (雑・述懐)

80 沖の小島も
人は住むらし (雑・水辺・人倫)

81 天地を神の代
よりもわかちきて (雑・神祇)

82 つらぬる歌の
道のただしさ (雑)

〈後土御門天皇〉

21 難波瀉なみを
まくらの船の中 (雑・名所・水辺)

22 松かぜとほく
ひびく住吉 (雑・神祇)

23 あとたれて神や
久しくなりぬらむ (雑・神祇)

24 うごかで代々
になれるわが園 (雑・人倫)

〈親長〉

94 菅原なれや

ちかきふしみは

(雑・神祇・名所)

95 都ぢをまもるも

神のこの社

(雑・神祇)

96 たのむ御池の

めぐみふかゝれ

(雑・水辺)

三者の連歌百韻全てに、神や神社が詠み込まれた句がみられることから、法楽連歌の特性であると考ええる。次に、実隆の句について詳しく見ていく。

26

○竹の宮こー皇大神宮に奉仕する齋宮の御所の異名(八雲御抄・卷三)。

(『歌ことば歌枕大辞典』深津睦夫執筆項「竹の都」を参照)

【用例】

「西山三籍集」秋乃部・一六六二

伊勢齋宮の古跡を見て

袖かけん竹のみやこのすゑの露

「西山三籍集」冬乃部・二八四九

参宮せし時

冬に見よ竹のみやこの千代の陰

○神さぶ (かみさぶ) — 「かむさぶ」とも。神々しい様子だ。古くなって神秘的な力をもつ。

(『歌ことば歌枕大辞典』より抜粋)

【用例】

『後撰和歌集』春下・一一六（よみ人しらず）

宮づかへしける女の、いその神といふ所にすみて、京のともだち
のもとにつかはしける

神さびてふりにし里にすむ人は都にほふ花をだに見ず

27

○ときはのかげ

常盤 ときは 「歌ことば」

永遠に変わらないさま、常緑樹の葉が一年中色を変えないこと、の意味に分かれる。

松に用いられることが多いが、「花の色も常盤ならなんよ竹の長きよに置く露しから
ば」(拾遺集・雑賀・一一六一・元輔)のように竹や、杉なども対象となる。

(『歌ことば歌枕大辞典』渡部泰明氏の執筆項を参照)

【用例】

『貫之集』・二四二

山里に神祭る

神まつる時にしなれば榊葉のときはの陰はかはらざりけり

『拾遺愚草』下・賀・二四九七（定家）

承元二年住吉歌合

我が君のときはのかげは秋もあらし月の桂の千世にあふとも

77

○ねぎごと

神への願い事。祈願。願掛け。

『歌ことば歌枕大辞典』

【用例】

『草根集』寄山祈恋・八四八五（正徹）

契あらば神の御室の山びこも声をつたへよ祈るねぎごと

78

○手向

神仏に幣帛（へいはく）や花などを供えること。主として旅の安全を祈るために行っ
た。 『歌ことば歌枕大辞典』

【用例】

『百人一首』二四・管家

このたびはぬさもとりあへず手向山もみぢのにしき神のまにまに

『雪玉集』五四九九・述懐（実隆）
手向には神の心をたねとして筆にまかするやまとことのは

「この野々神」は北野の神、つまり道真えお示すと考える。

79

○みこし岡―次に示す用例から北野の御輿岡社を示すと思われる。

【用例】

『新撰和歌六帖』六〇二（為家）

みゆきせしふるき北野のみこし岡あはれむかしはさぞなこひしき

『渚藻屑』一六三・（能桂）

みこし岡の松を見て

陰しげれおもふみこしの岡のまつ

三十三、実隆の述懐

長祿四年（一四六〇）、実隆が六歳のときに父が亡くなっており、この年に三条西家当主となつている。次に示す句は、実隆自身のことを詠んでいるのではないかと考える。

80 かきをく跡に

みぬよをぞしる

（雑・述懐）

81 たらちねの諫は

夢に成はてゝ

（雑・述懐）

82 たゞわれからと

物おもふ時

（雑・述懐）

83 月も又なみだの

底に明すぎぬ

（雑・光物）

80 句目の「かきをく跡」は父の残したもののか。

81 句目の「たらちねの諫は夢に成はてゝ」は父がいないことで、もう忠告や戒めが得られないことを表現していると考ええる。

四、挙句

<p>100 すまむ雲井の 秋の久しさ (秋・聳物)</p>	<p>100 かはらぬかげの 檜原楨原 (雑・山類)</p>	<p>100 はこぶたからの かずぞしられぬ (雑)</p>
<p>99 うつろふや月の 下水しずかにて (秋・光物・水辺)</p>	<p>99 山近きかたより 吹くやあきの風 (秋・山類)</p>	<p>99 四方の国しまく までもおさまりて (雑)</p>

文明九年（一四七七）に応仁の乱が終結した。当該連歌は、応仁の乱の終結から十年後に催された法楽連歌であった。

57 我ならでわくる
跡なき蓬生に (雑・人倫・植物)

58 みるだにすごし
あるゝふるさと (雑・述懐)

これらの句は、戦乱で荒れた姿を詠んだとみられる。実隆は、100句目で「すまむ雲井」と宮中を詠んでいる。澄んだ宮中で百韻を締めることで、和平を祈念していると考えられる。

まとめ

発句を後土御門天皇と甘露寺親長の作品と比較すると、実隆の「納涼」の表現は、両者と異なる特色があることがわかった。

行様を比較し、名所の句や神祇の句、述懐の句に注目すると、次のことが確認できた。

- ・名所の句では、歌枕が詠み込まれており、当該連歌で和歌の表現技法が用いられている。
- ・神祇の句では、神社や神が詠み込まれていることから、法楽連歌としての特性が見られる。

・述懐の句では、実隆自身のこと詠み込まれていると見られ、早くに父を亡くした孤独感が表れている。これは、独吟であったからこそ可能であったと考えられる。

当該連歌は、「納涼」という共通の発句題が与えられ、北野社にゆかりがある句が詠まれているという共通点を持ちながらも、独吟によって実隆の趣向が示されていた。

文明十九年六月二十五日の北野社御法楽は、戦乱を経験した連衆が、和平を祈念し、同時

上田萌生 「三条西実隆独吟『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』について」【発表資料】

に各々が自己の趣向を表現する試みであったと考える。

*和歌の引用は、『新編国歌大観』、連歌の引用は、『連歌大観』による。(適宜表記を私に改めた。)

〔参考文献〕

- 編：天理大学附属天理図書館『新天理図書館善本叢書 第31巻 連歌卷子本集一』
(二〇二〇) 八木書店
- 編：列聖全集編纂会『皇室文学大系 第一輯』(一九七九) 東京：名著普及会
- 編：京都大学文学部国語学国文学研究所『百韻連歌懐紙 曼殊院雑蔵』
(一九八四) 臨川書店
- 秋里湘夕『都名所図会 2』(一九八四) 新典社
- 伊地知鐵男『連歌の世界』(一九六七) 吉川弘文館
- 芳賀幸四郎『人物叢書 三条西実隆』(一九六〇) 吉川弘文館
- 廣木一人『連歌史試論』(二〇〇四) 新典社
- 宮川葉子『三条西実隆と古典学(改訂新版)』(一九九九) 風間書房
- 校注訳者：伊地知鐵男 表章 栗山理一『日本古典文学全集 51』(小学館)
- 『群書類従』ジャパンナレッジ版
- 『新編日本古典文学全集』(小学館) ジャパンナレッジ版
- 『日本国語大辞典』(小学館) ジャパンナレッジ版
- 『和歌文学大辞典』日本web図書館 古典ライブラリー
- 『歌ことば歌枕大辞典』日本web図書館 古典ライブラリー
- 『新編国歌大観』日本文学web図書館 和歌連歌俳諧ライブラリー
- 『私家集大成』日本文学web図書館 和歌連歌俳諧ライブラリー
- 『連歌大観』日本文学web図書館 和歌連歌俳諧ライブラリー
- 光田和伸(二〇〇七)「連歌の「詠み方」と「読み方」」『日本研究』第三六卷一三九―一六四頁)
- 『文明十九年六月二十五日／北野社御法楽／賦唐何連歌』
コレクション：広島大学文学部，福井文庫，国文/4748/N 『国書データベース』
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100018962/4?ln=ja>
- 『文明十九年六月廿五日北野社御法楽唐何』
〔写〕江戸後期
コレクション：東京大学総合図書館，連歌俳諧集成，青洲文庫(3402) 『国書データベース』
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100419920/3?ln=ja>
- 『御連歌』後土御／天皇 御製 宮内庁書陵部
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100312097/1?ln=ja>